サッカーと人種差別

—人種差別無きＪリーグへの改善策を探る—

石 田　界 渡

目次

はじめに

1．人種差別とは何か
　1．1　差別とは何か
　1．2　人種差別の概要

2．Ｊリーグにおける人種差別と対策
　2．1　Ｊリーグの概要
　2．2　Ｊリーグにおける人種差別
　　2．2．1　横断幕事件以前
　　2．2．2　横断幕事件の概要
　　2．2．3　横断幕事件以後
　2．3　Ｊリーグにおける人種差別対策
　　2．3．1　JFA とＪリーグによる対策
　　2．3．2　Ｊリーグ所属クラブによる対策～浦和レッズを例に～

3．欧州サッカーにおける人種差別と対策
　3．1　欧州サッカーリーグとボスマン判決
　3．2　欧州サッカーにおける人種差別
　3．3　欧州サッカーにおける人種差別対策
　　3．3．1　人種差別と闘う組織
　　3．3．2　欧州サッカーリーグの取り組み～ドイツを例に～

4．Ｊリーグから人種差別を撲滅するために
　4．1　欧州サッカーとの比較
　4．2　人種差別のないＪリーグに向けた改善策
　　4．2．1　Ｊリーグ側が行うべき改善策
　　4．2．2　サポーター側が行うべき改善策

おわりに

参考・引用文献

はじめに

スポーツは、誰もがいつでもどこでも自由に行うことができるものである。サッカーはその一つである。しかし、それを人種差別によって阻まれている選手がいる。私が 2014 年に観戦した、日本のプロサッカーリーグであるＪリーグの試合の観客席入り口に、「Japanese Only」という人種差別的な横断幕が掲げられていた。この事件がサッカー界だけでなく日本全体、そして世界中でも大きく報道されている様子を見て、驚き、この時からＪリーグにおける人種差別に興味を持った。それと同時に私は、「サッカー界における人種差別は海外で頻繁に起きているものであり、Ｊリーグには無縁である」と思い込んでいた自分に気がついた。Ｊリーグで人種差別が起きている原因や、それを撲滅させる策について考えたいと思い、このテーマを選んだ。

研究範囲はＪリーグと、海外においてサッカーが盛んであり人種差別も数多く起きている欧州サッカーリーグのうち、「5 大リーグ」と呼ばれる 5 カ国のプロサッカーリーグを対象にし、焦点を選手に絞って述べる。扱う時期は、Ｊリーグではプロリーグ化した 1993 年以降、欧州サッカーでは選手の流動化を促したボスマン判決の 1995 年以降とする。

研究方法としては、サッカーの専門誌や専門サイトを中心とする。Ｊリーグにおける人種差別の事例と対策を、欧州サッカーでのそれと比較し、原因と改善策を探る。

まず 1 章では、差別とは何かを確認した後、人種差別の概要を述べる。続く 2 章では、Ｊリーグの基本情報と人種差別の事例、対策について述べる。3 章では、現在の欧州サッカーの概要とそれができるまでの背景を確認した後、人種差別の事例を述べる。3 章の後半では、人種差別を減らしてきたドイツのプロサッカーリーグやアマチュアリーグと、欧州全体で人種差別と闘う組織について述べる。4 章では、2 章と 3 章で述べた人種差別の事例と対策を比較して、Ｊリーグで人種差別が起きている原因を明らかにし、Ｊリーグ側とサポーター側に分け、選手が気兼ねなくプレーできるようにするために、各々がすべき改善策を検討する。

１．人種差別とは何か

１．１　差別とは何か

「差別」という言葉を聞いて、私たちは何を思い浮かべるだろうか。「私は差別なんてしたことないし、されたこともないから、縁遠い話だ」ということや、「差別する人は酷いし、される人は可哀想だ」などといった、「自分の暮らしから離れた、どこかで起こっている出来事」（好井 2007:17）であると考える人は少なからずいるのではないだろうか。その考え方は、差別する側と差別される側の 2 つに分けてしまう二分法的な見方から生まれる。私たちは「差別の現実に出会うとき、こうした二分法の見方をほぼ無意識にあてはめてしまう」ことが多く、「『事件』という現実の″対岸″にいる」と思い込んでいるのである。(好井 2007:44)

しかし、差別は、「環境や福祉など社会問題の一つとして存在しているのではなく、まさに私たちが暮らしている現在の世の中の根底にある現象であり、社会のあらゆるところで、常に沸き起こっては消え、ということを繰り返している普遍的な現象」として捉えるべきである。（好井 2007:30）例えば、「オカマ」や「ゲイ」というジェンダーに関する言葉や、「ハゲ」や「チビ」といった身体的特徴をからかう言葉は、差別と言える。また、スポーツ中継を見ていて、試合の実況や解説の人が黒人のスポーツ選手に対して「身体能力が高い」というステレオタイプ的な発言を聞き、それをごく当たり前のように受け入れてしまっているスポーツファンは、少なからずいるのではないか。

このように、私たちが日常的に行っている「歪められたカテゴリーを無批判的に受容すること」（好井 2007:61）は、あからさまに行う差別と何ら変わりない立派な差別なのである。そのため、私たちは「誰もが差別を無意識に行なっている可能性がある」ということを自覚し、その問題性ついて常に考えるべきなのである。

１．２ 人種差別の概要

差別には様々な種類があるが、そのうちの一つに人種差別がある。人種差別とは、人種差別撤廃条約の定義によると、「人種、皮膚の色、世系又は民族的若しくは種族的出身に基づくあらゆる区別、排除、制限又は優先であって、政治的、経済的、社会的、文化的その他のあらゆる公的生活の分野における平等の立場での人権及び基本的自由を認識し、享有し又は行使することを妨げ又は害する目的又は効果を有するもの」である[1]。端的に述べれば、「違う身体や文化の特徴をもっている人たちを、警戒したり、軽蔑したりすること」である。（タハール・ベン シェルーン 2007:12）人種差別をする人は、身体的な特徴を見て得た情報や、巷から聞いた噂を用いて、「その人がどのような能力や性格であるのか」を瞬時に決めつける、偏見の持ち主であるとも言える。例えば、黒人を見ただけで、全く関わったことがないにもかかわらず、「怖い」「強そう」といった感情を抱く、といった具合である。これは私たちが皆、無意識に持ってしまっている可能性のある人種差別的思想である。しかし、人間は人種差別的思想を生まれながらにして持っているはずはない。行き過ぎた思想が社会に蔓延し、それに影響されて日常を過ごしてきた結果、持ってしまったものである。

では、なぜそうした人種差別的思想が社会に蔓延してしまったのだろうか。以下この節では渡邊（1994）を参考に、人種差別の生まれた背景から現在までの流れや行為の実態を簡単に振り返る。また、人種差別は様々な種類があるが、本論文で扱うＪリーグと欧州サッカーにおいて事例の多い黒人差別を中心に、大きな枠組みとしての人種差別について述べることとする。

人種差別が生まれた背景

人類の歴史を遡ると、かつて異なる人種間の接触は皆無、もしくは少なかったため、人種

[1]「あらゆる形態の人種差別の撤廃に関する条約」外務省
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jinshu/conv_j.html(2017.12.1)

差別の問題は存在しないか少なかったと考えられる。奴隷制や封建制、王制などが世界史の主役を演じていた古代・中世には、人種差別の問題は、階級関係に一定の作用を及ぼしていたが、大きな意味を持たなかった。人種差別が世界で大きく問題となったのは、近世の植民地化が発達した以降のことである。これ以前の白人は、有色人を非キリスト教徒として、人間以下のものとして扱っていたが、神学上の大論争を経たのちに、キリスト教に改宗しうる人間として有色人を扱うようになった。この変化を促したのは、一つには改宗者が実際に増えたこと、二つには、発達した機械制大工業が奴隷ないし超低賃金労働者として大量の有色人を必要としたからである。こうして有色人は、人間の範疇に入れられると同時に、人種差別の犠牲者になった。人種主義はこれを合理化するためにつくられたものである。人種主義とは、「発生的にせよ環境の作用であるにせよ、諸人種の間には優劣の差があり、優秀な人種が劣等な人種を支配するのは当然である、という思想ないしイデオロギー」のことである。多くの白人大衆はこの人種主義の虜となり、人種差別を当然のこととして受け入れた。こうしてキリスト教徒対非キリスト教徒という対立項は、白人対非白人という対立項に切り替えられた。16 世紀以来の 4 世紀間に、大西洋奴隷貿易によってアフリカから新大陸に連行された黒人は 1500 万人、奴隷狩りと輸送途中で死亡した黒人は 3500 万ないし 4000 万人といわれている。このようにして、植民地制度を中軸とする欧米先進資本主義諸国は、古代・中世のそれとは異質の、大規模に構造化した人種差別を行うようになった。

人種差別の実態

人種差別は多様な形態をもち、生活のほとんどすべての面に張り巡らされてきた。白人は有色人に対して、土地と主権を強奪し、国籍や所有権、参政権などの政治的権利や言論や出版、居住、職業、結婚、教育などといった市民的自由の権利を制限し、行政の権力を白人本位に行使し、低賃金、劣悪な労働条件、金融の制限を課した。さらに、ことばの使い方や礼儀作法を規制し、公共施設や娯楽施設の利用をも制限した。人種差別は、こうした公的な面だけでなく、私的な食堂、店舗、ホテル、日常の交際にまで及んだ。これらの人種差別を通して大部分の白人に人種偏見が植え付けられ、これがまた逆に人種差別を強化した。こうした差別と偏見に抵抗する者は、法律上ないし社会生活のうえ殺害や投獄、追放などの制裁を受け、ときにはリンチなどの私的制裁を受けている。

このように構造化した人種差別は、植民地または植民地的状況を残す社会に広くみられ、さらに同一人種内の民族差別に姿を変えて存在する。一例は日本である。アイヌ系住民に対する人種差別のほかに、旧植民地（朝鮮と台湾）と国内植民地（在日朝鮮人や在日アジア人の社会）に差別があり、現に存在している。

現在の人種差別

人種差別の問題をめぐる状況は、第二次世界大戦後に二度にわたって変容した。最初の変容は、戦後に植民地から解放されたアジアとアフリカにおいて、有色人の多くが政治上の権利回復と社会的地位の向上をかなりの程度まで勝ち取り、他方、国連を先頭とする国際世論の批判が人種差別に対して高まったことによる。この結果、人種差別を公然と行うことがむずかしくなり、人種差別解消の道は開かれた。しかしアフリカ南部、アメリカ合衆国南部、オーストラリアなど多くの国々には、法律に基づく人種差別が以前と大差のない状態のま

ま残された。

この流れが大きく変わったのは1960年代以降である。この年代を大きく特徴づけるものは、まだ独立していなかったアフリカ諸国の独立、および、アメリカ合衆国の黒人を中心とするブラック・ナショナリズムを契機として、世界各地の被差別有色人が有色人としての誇りを強化して、差別解消運動に立ち上がったことである。この趨勢をいっそう促進したのは、パレスチナ紛争、ソ連のユダヤ人問題、ベルギー・スペイン・カナダ・北アイルランドなどにおける少数民族紛争の激化、および、アジア人がアメリカ・フランスの白人と対決して白人を打ち破ったベトナム戦争である。これらを背景として、有色人の旧秩序に対する抵抗と抗争は激化した。しかもその闘いは第二次世界大戦前とは違って、一国内にとどまらず、直接・間接に国際的に連動するに至った。この結果、アメリカ合衆国における制度上の人種差別は解消し、これに触発されてイギリスの有色人（おもにインド・パキスタン系住民と黒人）問題とヨーロッパの移民問題が政策上の大きな課題として新しく登場し、ジンバブエ、ケニア、アンゴラ、モザンビークの人種差別政策が撤廃され、さらにオーストラリアの白豪政策と先住民差別政策も撤廃された。

こうした動きをみると、現象としては多くの人種紛争が激化したが、これを通して人種問題の解決が着実に漸進した。こうして、制度上の人種差別は大幅に是正されたが、私的な人間関係のなかには依然として人種差別と人種偏見は根強く残っている。

２．Ｊリーグにおける人種差別と対策

1章では人種差別について、差別という言葉の定義や大枠としての人種差別の歴史について振り返った。2章では、Ｊリーグでの人種差別と対策について確認するが、本題に入る前に、Ｊリーグの概要と人種差別問題に関わる外国籍選手枠について押さえておく。

２．１　Ｊリーグの概要

Ｊリーグとは、日本プロサッカーリーグのことである。1993年に10チームでスタートし、1999年からディビジョン1（J1）とディビジョン2（J2）の2部制に移行、2014年にはディビジョン3（J3）が創設された。現在J1は18チーム、J2は22チーム、J3は14チームが参入している。世界全体におけるサッカーを統括している国際サッカー連盟（FIFA）の下に、6つの大陸別地域連盟があり、208の国と地域のサッカー協会が加盟している。Ｊリーグは、そのうちの一つであるアジアサッカー連盟（AFC）に加盟する日本サッカー協会（JFA）を親団体として、日本のプロサッカーリーグを運営している。Ｊリーグの設立趣旨は以下の4つである[2]。

---

[2] 「公益社団法人日本プロサッカーリーグ規約・規定集」Ｊリーグ公式サイト https://www.jleague.jp/docs/aboutj/pdf_2017.pdf(2017.12.1)

１．「スポーツ文化」としてのサッカーの振興

日本のサッカーをより広く愛されるスポーツとして普及させることにより、国民の心身の健全な 発達を図るとともに、豊かなスポーツ文化を醸成。わが国の国際社会における交流・親善に寄与する。

２． 日本サッカーの強化と発展

日本のサッカーを活性化し、オリンピック、ワールドカップに常時出場できるレベルにまで実力を高め、日本におけるサッカーのステイタスを向上させる。

３． 選手・指導者の地位の向上

トップレベルの選手・指導者に、やり甲斐のある場を提供し、その社会的地位を高めていく。

４．競技場をはじめとするホームタウン環境の整備

地域に深く根ざすホームタウン制を基本とし、各地域において地元住民が心ゆくまでトップレベルのサッカーとふれあえるよう、スタジアム施設をはじめチーム周辺を整備する。

また、Ｊリーグではプレーできる外国籍選手の数が限られている。Ｊリーグにおける外国籍選手の扱いは、2017 明治安田生命Ｊ１・Ｊ２・Ｊ３リーグ戦試合実施要項第 14 条〔外国籍選手〕によると、以下の通りである[3]。

(1) 試合にエントリーすることができる外国籍選手は、１チーム３名以内とする。ただし、アジアサッカー連盟（ＡＦＣ）加盟国の国籍を有する選手については、１名に限り追加でエントリーすることができる。
(2) 登録することができる外国籍選手は、１チーム５名以内とする。
(3) Ｊリーグが別途「Ｊリーグ提携国」として定める国の国籍を有する選手は、前２項との関係においては、外国籍選手ではないものとみなす。

つまり、Ｊリーグ所属クラブにおける外国籍選手登録数は 5 名、このうち試合に出場することができるのは 3 名である。ただし、Ｊリーグが別途「Ｊリーグ提携国」として定めている国の国籍を保有する選手はこの枠に入らない。Ｊリーグ提携国は、2017 年 6 月時点で「タイ、ベトナム、ミャンマー、カンボジア、シンガポール、インドネシア、イラン、マレーシア、カタール」の 9 か国である。

ただ、ここに記載はないが、もう一つ外国籍選手と同じような扱いを受ける枠がある。それは、「日本の生まれであり、かつ、『日本で義務教育中』であるか『日本の義務教育を終了した』または『日本の高校・大学を卒業した』者については、『外国籍扱いしない

[3] 「公益社団法人日本プロサッカーリーグ規約・規定集」公益財団法人日本プロサッカーリーグ公式サイト
https://www.jleague.jp/docs/aboutj/pdf_2017.pdf(2017.12.1)

選手』としてチームに１名まで登録できる」という制度だ。この枠は、通称「在日外国人枠」「在日枠」と呼ばれている[4]。

２．２　Ｊリーグにおける人種差別

Ｊリーグにおける人種差別は、近年話題になっている。その理由として、2014 年に起きた浦和レッズの人種差別横断幕事件が与えた、社会への影響が大きい。この事件を軸にして事件以前と以後に分け、Ｊリーグにおける人種差別の歴史を確認する。

２．２．１ 横断幕事件以前

Ｊリーグが創設された 1993 年以来、人種差別が大きく取り上げられたことは数年間なかった。しかし、2014 年の横断幕事件以前では、2 つの事件が公となっている。

Ｊリーグで最初に人種差別的行為の疑惑があるとして話題になったのは、2009 年のことである。東京ヴェルディ 1969 に所属するブラジル人のレアンドロ選手が、ヴァンフォーレ甲府所属の杉山新選手に人種差別的発言を受けた、というニュースが報道された。森（2014）によると、試合終了後、両チームの選手がグラウンド中央に整列しお互い挨拶を交わした際、レアンドロ選手は杉山新選手からポルトガル語で「サル」と言われたと主張し、怒りを露わにした。一方で、杉山選手は「自分はポルトガル語を話せない」として、同主張を否定した。しかし、杉山選手はブラジル留学の経験があるため、その言葉を知っていた可能性があった。Ｊリーグは騒動の後、規律委員会を開き、両チームの当該選手らを事情聴取した。その際に、レアンドロ選手が所属する東京ヴェルディ 1969 のチームメートによって発言がなかったことが証言された。

その翌年、人種差別行為がはっきり確認された事件が起きた。2010 年 J1 第 12 節ベガルタ仙台と浦和レッズ（正式名称は浦和レッドダイヤモンズ）の試合で、それは起きた。浦和レッズの調査報告[5]によると、試合後浦和レッズサポーターと思われる 2、3 名が、スタジアムのスタンド下の選手バス駐車エリアから、出発するベガルタ仙台の選手バスに向かって、差別的発言を発したことが複数のベガルタ仙台側関係者等の証言から確認された。また、ベガルタ仙台の選手バスへの発言の前に、浦和レッズの選手バスに向かって、浦和レッズサポーターと見られる人物による野次の中で、ベガルタ仙台の選手バスに対するものと同じ差別的発言があったとの証言も得られた。チームバス内にいたベガルタ仙台の選手・スタッフには、差別的発言は届いていなかったとみられている。現場周辺にいたことが確認できたサポーターに聞き取り調査を行われたが、差別的発言の明確な確認はでき

---

[4] 「プロサッカー選手の契約、登録及び移籍に関する規則」公益財団法人日本サッカー協会公式サイト
http://www.jfa.jp/documents/pdf/basic/10.pdf(2017.12.1)

[5]「ファン・サポーターの皆様へ」浦和レッドダイヤモンズ公式サイト
http://www.urawa-reds.co.jp/clubinfo/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%82%B5%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%81%AE%E7%9A%86%E6%A7%98%E3%81%B8/(2017.12.1)

ず、人種差別発言をした人物は特定されなかった。発言内容も公式に発表されていないが、「ベガルタ仙台所属の在日朝鮮人の梁勇基選手に向けて発言された可能性が高い」とされている。

このように、Ｊリーグでは2009年から人種差別が話題となり、2010年にサポーターから選手に対して、明確に人種差別が行われたことが確認された。しかし、この時点ではＪリーグで人種差別撲滅に向けた大きな動きはなく、その皺寄せが2014年の横断幕事件でやってくる。

２．２．２ 横断幕事件の概要

次に、Ｊリーグ史上最大の人種差別事件である、浦和レッズの人種差別横断幕事件について述べる。

2014年J1第2節浦和レッズとサガン鳥栖の試合において、人種差別であると窺える横断幕が掲げられた。浦和レッズ公式サイトによると、とある浦和レッズサポーターグループのメンバーが、浦和レッズ応援席に向かう入場ゲート付近に「Japanese Only」と書かれた横断幕のほか、その後ろに日本国旗（日章旗）と、大日本帝国海軍の軍艦旗であり戦争を象徴する旭日旗を掲げた。この試合のホームクラブだった浦和レッズのクラブ運営本部は、それらを試合終了後まで放置した[6]。Ｊリーグ現理事長でもある村井満氏は、譴責と、次回ホームで行う試合を無観客試合で開催することを決定した。この処分の背景には、2013年に行われた第63回FIFA総会にて採択された「人種差別主義及び人種差別撲滅に関する決議」[7]がある。人種差別主義及び人種差別の排除はFIFA加盟協会の責任であるされ、JFAもFIFAの差別禁止規定を採用することを義務付けられたことが挙げられる。そして、JFAを親団体とするＪリーグもそれに伴い、2014年度から規則が変更されたため、この処分が科された。無観客試合によるクラブへの影響は莫大で、入場者、スポンサー収入などの損失額は3億円以上と予想されている[8]。

このニュースは、日本だけでなく世界各地の様々なメディアで大きく取り上げられた。人種差別の矛先について、様々な議論が飛び交った。掲載したサポーターは「ゴール裏は（サポーターの）『聖地』。（応援は）自分たちだけでやりたい。他の人は入ってきてほしくない。最近は海外からの人も来て統制が取れなくなる、という意図だった」（塚越

---

[6] 「3月8日Ｊリーグ浦和レッズ対サガン鳥栖におけるサポーターによるコンコース入場ゲートでの横断幕掲出について」浦和レッドダイヤモンズ公式サイト
http://www.urawa-reds.co.jp/wp-content/uploads/2014/03/efa71bb4821b60262c4f8001b71af4a3.pdf(2017.12.1)

[7] “63rd FIFA CONGRESS 2013 “Resolution on the fight against Racism and discrimination”” 公益財団法人日本サッカー協会公式サイト
https://www.jfa.jp/about_jfa/report/PDF/k20131114_02_01.pdf(2017.12.1)

[8] 「浦和 無観客で経済損失3億円…村井チェアマンが断罪 『放置は加担と同じ』」スポーツニッポン2014年3月14日朝刊
http://m.sponichi.co.jp/soccer/news/2014/03/14/kiji/K20140314007771270.html(2017.12.1)

2014：84）と説明している。しかし、様々なメディアやジャーナリストは、在日朝鮮人で日本国籍を取得し帰化した、浦和レッズに所属する李忠成選手に向けたものだ、とする考えが多い。2010年に起こした、在日朝鮮人の梁勇基選手の件があるからである。実際、横断幕事件が起きた2014年の第1節ガンバ大阪との試合でも、「サポーターからの一部選手に対する指笛が聞かれた」と公式発表しており、「李忠成選手に対してのものではないか」とされている。「浦和レッズサポーターには嫌韓の風潮がある」ということや、「『クラブチームのサポーターは、差別や悪意からではなく、新加入の選手に対して必ずしも最初から歓迎するわけではない』（清2016：156）ため、一概に人種差別であると決めつけることはできない」といった議論もある。横断幕の真意は不透明であるが、いずれにせよ、日本人以外の人がこれを見て「人種差別だ」と受け取りかねないものであった、ということは事実である。

Ｊリーグは、事件の発生後すぐに無観客試合をはじめとする処分を科したため、「世界基準の処分を実行した」として評価された。しかし、横断幕を放置したＪリーグの、人種差別に対する意識の低さが露呈された事件となった。

２．２．３ 横断幕事件以後

横断幕事件以後、日本のサッカーファンは人種差別に対して敏感になった。しかし、事件のわずか5ヶ月後に、またしても人種差別行為が起きた。2014年J1第21節横浜Ｆ・マリノスと川崎フロンターレの試合である。横浜Ｆ・マリノスのサポーターが川崎フロンターレに所属するブラジル人のレナト選手に対して、バナナを翳して挑発する行為がなされた。[9]

2015年と2016年には、浦和レッズのサポーターがSNSのTwitterを利用して、対戦相手の選手を人種差別的内容の投稿で侮辱した。2015年は、かつてまで行われていたＪリーグの優勝チームを決めるＪリーグチャンピオンシップの浦和レッズとガンバ大阪の試合で、ガンバ大阪に所属するブラジル人のパトリック選手に対してなされた[10]。2016年には、J1 1stステージ[11]第15節浦和レッズと鹿島アントラーズの試合で、鹿島アントラーズ所属のブラジル人カイオ選手に対してなされた[12]。また、浦和レッズとは関係のない事件

---

[9]「Ｊリーグの裁定内容及び再発防止策等に関して」横浜Ｆ・マリノス公式サイト
http://www.f-marinos.com/news/detail/2014-08-29/180000/172124(2017.12.1)

[10]浦和レッドダイヤモンズ公式サイト「SNSにおける差別的な投稿について（続報）」
http://www.urawa-
reds.co.jp/clubinfo/sns%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E5%B7%AE%E5%88%A5%E7%9A%84%E3%81%AA%E6%8A%95%E7%A8%BF%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%E7%B6%9A%E5%A0%B1/(2017.12.1)

[11] 2015年と2016年のＪ1におけるリーグ戦は、シーズンを半分に分け、前期を「1stステージ」後期を「2ndステージ」とする2期制をとり、最終的な優勝チームを、2ndステージ後に行うチャンピオンシップという年間王者決定戦で決めていた。

[12]浦和レッドダイヤモンズ公式サイト「SNSにおける差別的な投稿について（第3報）」
http://www.urawa-

が、同じ年にV・ファーレン長崎に所属する在日朝鮮人の李栄直選手も、匿名の人物からTwitterで差別される事件が起きた[13]。2017年9月にも、横浜F・マリノスに所属するキュラソー出身のマルティノス選手に対して、再びSNSのTwitterで人種差別行為が起きた。

以上のことから、2014年の横断幕事件以後、人種差別行為が毎年起きていることが分かる。SNSによる行為が多発していることが分かる。

２．３ Ｊリーグにおける人種差別対策

前節では、Ｊリーグで起きた人種差別の歴史を確認した。本節では、JFAやＪリーグの人種差別に関連する取り組みについて述べる。また、人種差別へのＪリーグ所属クラブの対策について、横断幕事件を起こした浦和レッズの取り組みを確認する。

２．３．１ JFAとＪリーグによる対策

本項では、JFAとＪリーグによる人種差別に関連した対策について述べる。

スポーツインテグリティの推進

JFA では「スポーツインテグリティ」を推進しており、スポーツの尊厳を脅かす人種差別や八百長、違法賭博、汚職、ハラスメントなどと闘っている。インテグリティとは「正直」「誠実」「高潔」を意味する言葉である。『JFANews10月情報号』によると、スポーツにおけるインテグリティとは、「スポーツがさまざまな脅威により欠けるところなく、価値ある高潔な状態」を言う[14]。スポーツの価値は、向上心や仲間意識、挑戦する意欲、また規律やマナー、責任感などを楽しみながら自然と身につけられるところにある。また、人々に勇気や生きがいを与え、社会を明るく、良い方向に導く力を持っている。スポーツが社会を明るく照らす力となるには、そのインテグリティが守られていなければならないのである。

それを実現するため、JFAは「リスペクトプロジェクト」を開始した。サッカー、スポーツの社会的役割を強く自覚し、2008年度より、サッカー界におけるリスペクトの重要性を認識し、これを開始した。リスペクトを「大切に思うこと」とし、サッカー界におけるリスペクトの認知の浸透に、大会時のプロモーション、審判員によるワッペンの装着、指導者養成その他、様々な方法で努めている。

---

reds.co.jp/clubinfo/sns%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E5%B7%AE%E5%88%A5%E7%9A%84%E3%81%AA%E6%8A%95%E7%A8%BF%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%E7%AC%AC3%E5%A0%B1/(2017.12.1)

[13]毎日新聞2016年6月16日西部夕刊「Ｖ長崎選手ツイッターに差別投稿　被爆者や朝鮮人、侮辱」
https://mainichi.jp/articles/20160616/ddg/041/050/004000c (2017.12.1)

[14] 公益財団法人日本サッカー協会『JFAnews10月情報号』2016, 5頁

その活動の一環としてJFAは、2011年からFIFAのフェアプレーデイズに合わせて毎年シンポジウムを開催している。『JFANews10月情報号』によると、そこでは「リスペクトフェアプレーとは何か。なぜ指導の現場で体罰や言葉による暴力が起こるのか。選手たちを守るために大人はどうすべきか。関係者やサッカーファミリーと議論を重ね、意見を交換しながら理解を深める」ことを目的として、開催されている[15]。その他、2013年にAFC加盟国の協会として初めてとなる、FIFAと国際刑事警察機構主催のインテグリティワークショップや、2014年には各年代日本代表選手へのインテグリティ教育、協議会、セミナーなどが定期的に行われている。
また、「リスペクトFC JAPAN」というヴァーチャルなフットボールクラブも設立された。これは、ホームページ内に設置された「クラブハウス」を拠点に、クラブ員が一体となってプロジェクトを推進していくものである。参加型の場を設定することで、リスペクトへの賛同の意思表示をする場として、FIFAフェアプレーデイズ2011に合わせ、2011年9月に開設された。リスペクトFC JAPANのクラブハウスには様々なコンテンツが用意されており、クラブ員の動画メッセージや国内外の活動報告などの閲覧や、自ら意見や活動を投稿することもできる。クラブ員には、行動で示すこと、仲間を増やすことを、日常の活動において意識してもらう。そして、スポーツのジャンルを超え、多くの人々がこのリスペクトFC JAPANに参加することで、リスペクトの精神、つまり「大切に思うこと」が社会全体に広がることが期待されている[16]。

問題の防止・解決に努める専門家の設置

Ｊリーグでは、クラブが抱える諸問題を解決するにあたって、２つの専門家が設置されている。

１つ目は、2014年4月よりＪリーグ各クラブに導入された、コンプライアンスオフィサーである。これは、一般社団法人コンプライアンス推進機構によると、企業における法令順守の責任者として、企業倫理の観点から経営陣をサポートし、意見具申を行う責務を負う者であり、経営理念等を頂点とする行動基準体系の立案・整備、コンプライアンスリスクの評価、組織の内部統制整備プランの立案、倫理・法令遵守の推進などを行っている[17]。毎年、JFAとＪリーグ、日本スポーツ振興センターが共催するインテグリティセミナーにも出席している。

２つ目はウェルフェアオフィサーである。これは、サッカーの活動現場における暴力や暴言などをなくすために作られたもので、2015年6月にJFAがリスペクトフェアプレーの施策として導入した。「リスペクトやフェアプレーを啓発、促進」「暴力、差別等の予防

---

[15] 公益財団法人日本サッカー協会『JFAnews10月情報号』2016, 5頁
[16]「RESPECT F.C.JAPAN 設立趣旨」公益財団法人日本サッカー協会公式サイト
http://www.jfa.jp/football_family/respectfc_japan/about.html(2017.12.1)
[17]「認定コンプライアンス・オフィサー 認定コンプライアンス・アドバイザーとは」一般社団法人コンプライアンス推進機構
http://www.ocod.or.jp/cco_cca_gaiyo.html(2017.12.1)

活動（問題の顕在化を未然に防ぐ）」「諸問題対応、問題解決」「司法機関や諸関連組織への橋渡し」などといった役割を担い、各種サッカー協会、連盟、競技会、クラブに設置している。『JFANews10 月情報号』によると、3 種類の役割があり、各協会・連盟等を担当する「ウェルフェアオフィサー（ジェネラル）」、公式大会やリーグ戦を担当する「マッチ・ウェルフェアオフィサー」、クラブでの日常活動を担当する「クラブ・ウェルフェアオフィサー」である[18]。

Ｊリーグ発展に向けた「2 つの土台」

宇都宮（2014）によると、Ｊリーグが今後より良いリーグに発展していくために、Ｊリーグ現理事長の村井満氏はインタビューにて、絶対に譲れない「2 つの土台」があると述べでいる。1 つ目は「オープン」である。村井氏は、横断幕事件を受けて「Ｊリーグのスタジアムは本来、子供でも女性でもお年寄りでも外国人でも、誰でもウェルカムというオープンな思想であるべきで、その真逆にあるのが差別的な考え方である」と語っている。Ｊリーグは、誰もがプレーや応援、サポートができるプロサッカーリーグを目指しているのである。

2 つ目は、「3 つのフェアプレー」である。第一に「ルールを守る」「レフェリー（審判）や相手に敬意を払う」といった「ピッチ上のフェアプレー」、第二に身の丈に合わない経営で借金を重ねない「ファイナンシャル・フェアプレー」、第三に八百長や差別や暴力をなくす「ソーシャル・フェアプレー」である。人種差別撲滅に関わる「ソーシャル・フェアプレー」の浸透に向けた取り組みにおいて、リーグとしては、①ソーシャル・フェアプレーの徹底に関する研修システムの構築②研修の早期実施③ソーシャル・フェアプレーを侵害するような事案（いわゆる有事）に対応する組織体制のメンテナンスと再編④上記を基軸として、「コンプライアンス規程」等の規程関係のメンテナンスと再編を行う。クラブでは、①「コンプライアンス・オフィサー」の専任（従来のコンプライアンス担当を発展的に改める）②クラブに所属する全員を対象に、ソーシャル・フェアプレーの徹底に関する研修の受講開始③いわゆる有事が起きた際の対応組織をクラブ内に設ける、といった対応を取っている[19]。

今後の具体的活動案としては、①八百長対策セミナーの再実施②不当要求防止責任者講習③人権研修④コンプライアンス研修を実施する、としている。

Ｊリーグは誰もが自由に関わることができる「オープン」のスタンスを取り、それに関わる人々が「ソーシャル・フェアプレー」を含めたあらゆるフェアプレーを守ることで、人種差別の無い、魅力的なサッカーリーグを目指している。

---

[18]公益財団法人日本サッカー協会『JFANews10 月情報号』2016

[19]「3 つのフェアプレー」公益財団法人日本プロサッカーリーグ公式サイト https://www.jleague.jp/sp/aboutj/3fairplay/(2017.12.1)

２．３．２Ｊリーグ所属クラブの取り組み～浦和レッズを例に～

前項のように、Ｊリーグではスポーツインテグリティを推進する JFA のもと、人種差別撲滅に向けて様々な施策を行なっている。Ｊリーグ所属クラブでも、先述した「ソーシャル・フェアプレー」をはじめ、人種差別対策を行うようにＪリーグから勧告されている。本項では、全クラブにおける人種差別対策を確認することは難しいため、人種差別撲滅を積極的に訴えているクラブの一つとして、浦和レッズの取り組みを取り上げる。

「SPORTS FOR PEACE！」プロジェクト

浦和レッズは、2010 年 6 月にベガルタ仙台との試合後に、サポーターの人種差別行為が発覚し、処分が科されている。その 1 ヶ月後の 7 月から、国連関連機関「国連の友アジアーパシフィック」と連携し、「闘いとルール」のあるスポーツを通じて喜びや寛容の精神、平和の理念を追求する「SPORTS FOR PEACE！」プロジェクトがスタートした。具体的な活動内容として 3 つ定められた。①『SPORTS FOR PEACE！』のロゴをキーに、「ルールに基づいた闘い」をチーム・クラブ全員が実践する。そのために、人権擁護を含むクラブ内教育活動を実施する②すべてのホームゲームで.『SPORTS FOR PEACE！』のバナーを掲げる等スタジアム内外での告知・啓発活動等を展開し、ファン・サポーターの皆様に対して『SPORTS FOR PEACE！』への参画を呼び掛ける③国連の友アジアーパシフィック、自治体等関係機関による各種啓発活動に積極的に選手・スタッフも含めて参画する、である。また、同じタイミングで試合運営管理規程等を見直し、「差別的発言」を「重点禁止 6 項目」の一つにいれ、スタジアム内外で広く告知活動することとなった[20]。

差別撲滅宣言と『“ZERO TOLERANCE”（絶対許さない）』の策定

2014 年 3 月に人種差別横断幕事件を起こした浦和レッズは、その数日後に差別撲滅宣言をした。内容は、「人種、肌の色、性別、言語、宗教、または出自などに関する差別的あるいは侮辱的な発言または行為を認めないこと」「サッカーを通じて結ばれた仲間と共に差別と戦うこと」を誓った[21]。また、提携する国連の友アジアーパシフィックと共に、「誇りあふれるスタジアムを！」というコンセプトのもと、差別撲滅に向けた取り組みと目標を定め実施するアクションプログラム、“ZERO TOLERANCE”を策定した。期間は 2014 年 4 月から 2019 年 4 月までの 5 カ年計画で、第三者検証委員会を設けて、プログラムの実施状況を「国連 平和と開発のためのスポーツ局」に報告することとなった。プログラ

---

[20] 「『SPORTS FOR PEACE！』プロジェクトについて」浦和レッドダイヤモンズ公式サイト http://www.urawa-reds.co.jp/clubinfo/%E3%80%8Csports-for-peace%EF%BC%81%E3%80%8D%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%82%AF%E3%83%88%E3%82%92%E9%96%8B%E5%A7%8B/(2017.12.1)

[21] 「差別撲滅宣言について」浦和レッドダイヤモンズ公式サイト http://www.urawa-reds.co.jp/clubinfo/%E5%B7%AE%E5%88%A5%E6%92%B2%E6%BB%85%E5%AE%A3%E8%A8%80%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6/(2017.12.1)

ムの内容としては、啓発活動やサポーターとの意見交換・勉強会、政府や自治体との協調的活動、年次活動レポートの作成など、多岐に渡る。差別撲滅に向けたFIFAのルールや方針に対する選手、指導者、スタッフ、そしてスタジアム来場者の意識の向上を目標としている。現在では、「SPORTS FOR PEACE！DAY」としてブースを設け、「差別撲滅宣言」に関するアンケート調査や、人種差別に関するビデオの上映、クイズパネルの掲示などを行なっている[22]。

３．欧州サッカーにおける人種差別と対策

３．１　欧州サッカーリーグとボスマン判決

2章では、Ｊリーグの人種差別とそれに対する取り組みを確認した。3章では、サッカーレベルの高さと人気、そして人種差別の歴史もある欧州サッカーリーグを取り上げ、Ｊリーグとの比較をする。

欧州で行われているプロサッカーリーグは、50以上もある。この中でも、スター選手が集まり、実力と人気を兼ね備える「5大リーグ」がある[23]。それが、イングランドのプレミアリーグ、スペインのリーガエスパニョーラ、イタリアのセリエA、ドイツのブンデスリーガ、フランスのリーグアンである。この5つのリーグが有名になった背景に、次に述べるボスマン判決の影響が大きくある。

ボスマン判決

欧州サッカーを大きく変えた出来事が、ボスマン判決である。以下、陣野（2014）を参考に、ボスマン判決についてまとめる。

1990年、ベルギーリーグのRFCリエージュでプレーしていたジャン＝マルク・ボスマンは、クラブとの契約が満了するのを機に、オファーのあったフランスのリーグアン2部に所属するUSLダンケルクに移籍することを希望していた。しかし、USLダンケルクはRFCリエージュの求めた移籍金を拒否した。RFCリエージュではすでに構想外で選手登録されず、これを不服とするボスマンがルクセンブルクにあるヨーロッパ司法裁判所に訴えた。1995年に判決が下され、ボスマンの勝訴となった。

---

[22]「浦和レッズ 差別撲滅に向けたアクションプログラム『”ZERO TOLERANCE”（絶対許さない）』の策定について」浦和レッドダイヤモンズ公式サイト
http://www.urawa-reds.co.jp/clubinfo/%E6%B5%A6%E5%92%8C%E3%83%AC%E3%83%83%E3%82%BA-%E5%B7%AE%E5%88%A5%E6%92%B2%E6%BB%85%E3%81%AB%E5%90%91%E3%81%91%E3%81%9F%E3%82%A2%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B0%E3%83%A9/(2017.12.1)

[23] フランスのリーグアンを除いた「4大リーグ」と言われる場合もある。

判決によって可能になったことは、第一に、ボスマンを初めとするEUの選手たちは、契約期間が満了すると、自由に移籍することができるようになったことである。第二に、「労働者はEU域内であれば自由に移動することができる」というEU内での労働条件がプロサッカー選手にも適用されたことである。つまり、この判決以後、欧州でプレーする選手たちはいわば同じ「ヨーロッパ人」扱いになったのである。
この2つによって、元の所属クラブは選手の所有権を主張できなくなり、有名選手のEU内での移籍が一気に加速した。選手の側としては、1つのクラブとの契約期間を短く設定して2、3年の間、派手な活躍をして、強豪クラブへ移籍しプレーする、といった成功への階段を夢見ることができるようになった。クラブの側としては、有名選手をかき集めることができる資金力を持つクラブは、ヨーロッパ中から契約期間の切れた選手を集めることができ、強豪クラブを作り上げることが可能になった。また、これまで「外国人」として扱われてきた選手は「ヨーロッパ人」となり、外国人枠が空くため、非ヨーロッパ圏内出身の選手の門戸が開かれた。
こうして、欧州サッカーはボスマン判決の結果、多国籍の選手が様々なリーグに混在し、なおかつ5大リーグに代表されるように、ハイレベルなリーグが形成されるようになった。

３．２ 欧州サッカーにおける人種差別

ボスマン判決以降、欧州の様々な選手が各地でプレーするようになった。しかし、それに付随して人種差別も横行した。本節では、欧州サッカーリーグにおける人種差別の事例を挙げる。扱う範囲は、ボスマン判決の1995年以降で、欧州5大リーグを中心に代表的なものを差別方法ごとに述べていく。また、断りがある部分を除き、陣野（2014）を参考に述べる。

サポーターによる行為

最も多いとされる事例は、サポーターによる選手への人種差別的応援や野次である。スペインのリーガエスパニョーラでは2006年、カメルーン出身のサミュエル・エトー選手が野次を受けた。審判に猛抗議し、場内アナウンスで侮辱的行為を慎むよう要請したものの、火に油を注ぐ逆効果を表す形となり、野次は試合終了まで続いた。イタリアのセリエAでは、ガーナ出身のケヴィン・プリンス・ボアテング選手に対して、相手サポーターから人種差別的応援歌が歌われた。2011年には、ベルギー1部リーグのジュピラー・プロ・リーグで、日本代表の川島永嗣選手に対して、対戦相手のサポーターが東日本大震災と絡めて「カワシマ、フクシマ」と侮辱した。2017年にも、4月にイタリアのセリエAでガーナ出身のサリー・ムンタリ選手、9月にはイングランド・プレミアリーグにて、コンゴ民主共和国にルーツを持つベルギー出身のロメル・ルカク選手に対して行われている。
また、Ｊリーグで横行しているSNSによる人種差別は欧州でも行われている。2015年には、プレミアリーグのリバプールFCに所属していたガーナ共和国にルーツを持つイタリア出身のマリオ・バロテッリ選手が、SNSで人種差別的メッセージの被害を受けていた。

彼は、2014/2015 シーズン[24]中 Twitter や Instagram にて公式アカウントを運営、日常を発信していたが、2015 年 4 月時点で既に 8000 通の侮辱的メッセージが送られ、その半分に当たる 4000 通が人種差別メッセージだとみられている。彼はこれまで数えきれないほど人種差別を受けてきた選手の一人であり、2017 年 1 月にもフランスのリーグアンにて、対戦相手のサポーターから猿を真似る応援歌による黒人差別を受けている[25]。2014/2015 シーズンにおいて彼の他に、ジャマイカにルーツを持つイングランド出身のダニー・スターリッジ選手は 16000 通、ダニー・ウェルベック選手は 17000 通の人種差別メッセージを受けた[26]。

選手による行為

選手による人種差別行為にも様々なものがある。その 1 つが侮辱発言である。イングランドのプレミアリーグでは 2011 年、ルイス・スアレス選手が、セネガル出身のフランス人であるパトリス・エヴラ選手に対して、黒人を意味する「ニグロ」という言葉を用いて挑発した。

また、ジェスチャーという形でも行われている。2013 年、フランス出身のニコラ・アネルカ選手がウェスト・ハムとの試合で得点を決めた後、反ユダヤ主義のポーズをした。フランスのリーグアンでは、2007 年にも人種差別が起きた。オリンピック・リヨンに所属するチェコ出身のミラン・バロシュ選手は、対戦相手のスタッド・レンヌ FC に所属するカメルーン出身のステファン・エムビア選手が試合中身体を寄せてきた際、自分の鼻をつまみ、もう片方の手を煽ぐように使って、臭いもののように扱う人種差別的ジェスチャーをしている。

このように、欧州サッカーでは人種差別が横行しており、差別の対象とされた選手や方法は、述べたもの以外にも様々である。1 章で述べた、植民地制度時代より根付いている人種差別や人種偏見が現在のサッカーにも多大な影響を及ぼしており、有色人、特に黒人の選手への差別行為は目立っている。また、ユダヤ人や日本人選手も差別の対象とされていることが分かる。

---

[24]開催年度にもよるが、Ｊリーグが行われるシーズン期間は基本的に 3 月から 12 月であるのに対して、欧州サッカーのシーズンは 8 月から翌年 5 月である。そのため、現在行われている欧州サッカーのシーズンは「2017/2018 シーズン」という言い方をする。

[25]「バスティア、バロテッリへ人種差別チャントをした 40 歳男性を出入り禁止処分に」ゲキサカ
https://web.gekisaka.jp/news/detail/?208421-208421-fl(2017.12.1)

[26]「バロテッリ、今季 SNS で 4000 通以上の人種差別メッセージを受けていたことが判明」フットボールチャンネル
http://www.footballchannel.jp/2015/04/17/post83311/(2017.12.1)

３．３ 欧州サッカーにおける人種差別対策

３．３．１　人種差別と闘う組織

前項で確認したように、欧州サッカーでは様々な人種差別が、Ｊリーグで起きる以前から横行している。同時に、欧州サッカーでの人種差別への対策は、日本が取り組み始めた頃よりも前から行われてきた。その代表例が「Football Against Racism in Europe（FARE）」である。日本語訳すると、「欧州サッカー反人種差別行動」である。これは、「Football Supporters Europe（FSE）」というヨーロッパのサッカーファンの文化の向上に関する活動を行なっている、欧州規模のサポーター組織から生まれた国際 NGO である。活動内容は、「月刊の機関紙を発行しており、欧州大陸全域で発生した人種差別にまつわる出来事や事件をリストアップや、反人種差別行動に関する情報の掲載、FARE アクションウィークの開催など、欧州全域でサッカーと関連する人種差別反対イベント」を行っている。（Gabriel Kuhn 2011=2012:209）欧州サッカーを統括する欧州サッカー連盟（UEFA）は、主に FARE と連携することで人種差別と闘っている。しかし、Gabriel Kuhn（2011=2012）は「人種差別に反対する闘いの制度化は両刃の剣であり、空虚な道徳主義やスローガン倒れ、偽善といった問題になってはならない」と主張している。

反人種差別活動が盛んに行われている国の１つとして、イギリスが挙げられる。1997 年にイングランドで設立された、"Kick It Out"という団体がある。これは、1993 年の the'Let's Kick Racism Out of Football' campaign から生まれたもので、FIFA や UEFA、FARE と緊密に連携しており、欧州評議会や欧州議会議員からも評価されている[27]。しかし、当団体も形骸化を指摘される報道があった。2011 年、当時プレミアリーグ１部のクイーンズ・パーク・レンジャーズ FC に所属していたイングランド出身のアントン・ファーディナンド選手が、対戦相手のチェルシーFC に所属するイングランド出身のジョン・テリー選手に人種差別的発言を受けた疑いがあった。しかし、処分はされず、彼と彼の兄であり、イングランド代表の英雄であるリオ・ファーディナンド選手は、このイングランド・サッカー協会とイングランド・サッカープロ選手協会の対応に腹を立てていた。事件から１年後、２人は Kick It Out キャンペーンの一環であった T シャツの着用を拒否した。この件について、彼らは「Kick It Out については、これまで彼らが行ってきた仕事が非常に素晴らしいものだと言っておきたい。しかし、時代は変わるもので、組織も変わらなければいけない。我々は、Kick It Out をより適切なものとするための議論に喜んで参加する」[28]と述べており、当キャンペーンに厳しい姿勢を見せている。

---

[27] "KICK IT OUT TACKLING RACISM & DISCRIMINATION" KICK IT OUT http://www.kickitout.org/about/(2017.12.1)

[28]「事件から１年、リオとアントンが共同声明」Goal. com http://www.goal.com/jp/news/74/%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%89/2012/10/25/3475885/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%83%BC%E3%83%87%E3%82%A3%E3%83%8A%E3%83%B3%E3%83%89%E5%85%84%E5%BC%9F%E5%8D%94%E4%BC%9A%E3%81%AE%E5%8B%95%E3%81%8D%E3%81%AB%E4%B8%8D%E6%BA%80(2017.12.1)

イギリスでは、1996 年に設立したスター選手を中心に世の中の人種差別撤廃を訴える“Show Racism The Red Card”やサッカーにおける人種差別と闘う“Football Unites, Racism Divides”など反人種差別団体があるが、人種差別行為が未だ相次いでいるのが現状である。

３．３．２　欧州サッカーリーグでの取り組み～ドイツを例に～

前項でも確認した通り、欧州サッカーリーグではボスマン判決により様々な国籍の選手があらゆるクラブに所属できるようになったことで、欧州サッカーのレベルは上がったものの、数多くの人種差別行為は横行している。しかし、人気と実力を兼ね備えつつも、人種差別が比較的少ないリーグもある。ドイツのブンデスリーガはその中の一つであると言われている。そこで、まずブンデスリーガの特徴を確認し、次に人種差別との向き合ってきた歴史を振り返る。

ブンデスリーガの特徴～「ドイツ人枠」と育成システム～

ブンデスリーガの特徴を、鈴木（2011）を参考にまとめる。

1963 年に創設されたブンデスリーガは、ドイツサッカーリーグ（ＤＦＬ）が管轄しており、ブンデスリーガに 18 チーム、ブンデスリーガ２部に 18 チーム、計 36 チームが所属している。3 部のドリッテ・リーガと 4 部のレギオナルリーガは、ドイツサッカー連盟（ＤＦＢ）の管轄となっている。

ブンデスリーガの大きな特徴の一つとして、外国籍選手の扱いが挙げられる。ブンデスリーガでは、2006/2007 シーズンより外国籍選手枠を撤廃している。かつては他の国と同じように EU 圏外の外国籍選手の枠は 3 人であったが、EU に加盟する国が増加したことや、南米出身の選手が EU パスポートを取得するケースが増えたこと、あるいはドイツの国籍法が変わって市民権が取得しやすくなったことなどの影響で、外国籍選手枠を設けていても実質的にはドイツ人以外の選手が増える一方であった。そのような中、外国籍選手枠を 5 人に増やしたり 3 人に再び戻したり、試行錯誤を繰り返した末、2006/2007 年シーズンから完全に撤廃となった。それと同時に、クラブにはドイツ国籍の国内ユース出身選手の登録も義務付けられた。各クラブは最低 12 人のドイツ国籍選手を登録し、そのうち 8 人は必ず地域出身選手でなければならない。さらに、そのうち 4 人はそのクラブのユース出身でなければならないというルールを設けている。この制度の影響で、Ｊリーグからブンデスリーガへ移籍する日本人選手も急増し、2017/2018 シーズンにプレーしている選手は、１部リーグだけで１０人いる。

ただこの仕組みが成り立つには、各クラブが自前で優秀な選手を育てることができなければ、単にリーグレベルの低下を引き起こしかねない。そのため、ドイツでは徹底した育成プログラムが組まれている。遡ること 2000 年、UEFA 欧州選手権という欧州で最も強い代表チームを決める大会で、ドイツ代表は 1 分 2 敗で敗退してしまった。そこで危機感を持った DFB は、育成プログラムを組み、2002 年にスタートした。ドイツ国内の 366 カ所に育成センターを設立し、11 歳から 17 歳までの優秀な選手を見落とすことなく集め、1000 人のコーチと各エリアを統括するコーディネーターがタレントの育成に尽力している。選手は週 1 回、無償で指導を受けることができる。また、DFB は 366 カ所の拠点とは別に、ブ

ンデスリーガの1部と2部の各クラブにトレーニングセンターや選手寮を持たせ、エリート選手のための教育を行うことも義務付けた。
このように、ドイツは外国籍選手枠の撤廃し「ドイツ人枠」を設け、育成システムを確立した結果、若いドイツ人選手たちが成長し、2014年FIFAワールドカップでは優勝という結果をもたらした。ブンデスリーガの実力も成長しており、UEFAチャンピオンズリーグにおいては、FCバイエルン・ミュンヘンがここ10年間で3回決勝まで勝ち進み、2012/2013シーズンでは同じくブンデスリーガのボルシア・ドルトムントと決勝戦を演じた。また、ブンデスリーガは世界一の観客動員数を誇っており、2016/2017シーズンでは歴代最多を更新した[29]。これには観客の動員の成功には様々な理由があるが、レベルの高いリーグに出来上がったことも大きな要因である。
こうして、ブンデスリーガは自国の選手だけでなくあらゆる国籍の選手が活躍できる場を整え、実力と人気を兼ね備えてきた。

人種差別と闘うドイツサッカー

次に、ドイツサッカー全体の人種差別撲滅への取り組みを確認する。
以下では、ビジネス、インターネット、ジャーナリズム、カルチャーなど様々なコンテンツを扱うアメリカ発の雑誌「WIRED」のWebサイトに掲載された「ドイツサッカーは、いかに人種差別と戦ったか」を参考にまとめる。

ドイツサッカー界は、差別撲滅に本腰を入れている。その背景には、ブンデスリーガ4部以下のアマチュアリーグでの観客による選手への侮辱行為や脅しがあった。4部リーグでナイジェリアにルーツを持つドイツ人キーパー、アデヴォバレ・オグンクブレ選手は、敵チームのファンから猿まねや罵声などの黒人差別を受けていた。2006年3月、ライバルチームとの一戦で、彼は自分を馬鹿にしたFCハレのサポーターに対し怒りを爆発させ、ナチス式敬礼をすることで侮辱に応えたが、試合後に相手チームファンに殴打され、首を絞められる暴行にあった。彼の元チームメートは、彼の友人であり当時はアイントラハト・フランクフルトでキャプテンを務めていたジャーメイン・ジョーンズ選手に、FCザクセンのサポーターが始めた「ぼくらもアデとともに」という活動に対する支援を願い出た。そこでジョーンズは、雑誌『ZICO』が行なっていたキャンペーン「Respekt! Kein Platz für Rassismus」(「リスペクト！人種差別に居場所はない」の意）を知り、この運動を全国区で広めようと活動を開始した。オグンクブレの支援を求めて起こった動きは、フランクフルトのローカルキャンペーンと結びつくことで、大きな運動となっていった。そこに元ドイツ女子代表でドイツサッカー協会スーパーバイザーのシュテフィ・ジョーンズ氏が目をつけ、彼女の主導によって「Respekt!」キャンペーンがつくられていった。
現在、この看板はドイツ全土の200に及ぶスタジアムに貼り出されており、ドイツで200万人以上の組合員が加盟する世界最大の労働組合であるIG Metallがスポンサーとなり、人種問題だけでなく、宗教や性的志向、障害者など、マイノリティに対する差別撲滅をテーマとした雑誌を出版するほか、動画配信なども行っている。

---

[29] 「ブンデス1部2部、歴代最多観客動員数を記録」Kicker日本語版 http://kicker.town/bundesliga/2017/06/56650.html(2017.12.1)

また、1999 年に断行された出生地主義を採用する国籍法の改正や、2006 年に制定されたあらゆる差別の禁止を法律で定める一般平等待遇法など、国家レベルでの政策の大変換もあった。

しかし、それでも人種差別は消えていない。2013 年 8 月に行われた 2 部リーグ 1860 ミュンヘン対インゴールシュタット戦で、インゴールシュタットに所属し、アンゴラとコンゴ民主共和国にルーツを持つドイツ人、ダニー・ダコスタ選手は、この試合中何度も相手サポーターから、人種差別的な罵声を浴びさせられていた。また、ブンデスリーガの 1〜3 部リーグでは、スタジアムに警官隊や各クラブが配置するセキュリティスタッフがスタジアムに配備され、かつ人種差別に敏感なファンが多いため、スタジアムでの人種差別は起こりにくい状況になっている。しかし警察がほとんど関与せず、予算的にセキュリティスタッフを配置するのが難しい 4 部リーグ以下のアマチュアリーグでは、人種差別的な侮辱行為はいまなお日常茶飯事である。

そこで下部のアマチュアリーグでは、サポーターたちが自主的に反人種差別活動に取り組む例が起き始めている。例えば、5 部リーグのニーダーザクセン州リーグに所属するゲッティンゲン SC05 のファングループ「Supporters Crew 05」は、2014 年 2 月、クラブハウス内でサッカーにおける人種差別問題を扱った展示会を行った。展示の内容は人種差別の様々な形態、差別的応援の具体例、ゲイ、レズビアンに対する差別などで、差別問題を扱った映画上映や講義会を開き、ネオナチ的なグループに誘われないよう若いファンに向けて呼びかけを行った。ファングループ、市民団体など自らが積極的に人種問題に取り組むことで、政治や行政、及びクラブ責任者に頼らず、自分たちで解決方法を考え実行する、より自主的な活動がアマチュアリーグにおいても根付きつつある。

このように、ドイツでは差別撲滅キャンペーンだけでなく、サポーター自らが人種差別に対して敏感になり、危機感を持って闘う姿が見受けられる。その結果、現在のドイツサッカーでは、人種差別だけでなくあらゆる差別の問題がさほど顕在化していない。

４．Ｊリーグから人種差別を撲滅するために

２、３章では、Ｊリーグと欧州サッカーで起きている人種差別とその対策、ドイツでの取り組みを確認した。
本章では、人種差別無きＪリーグとなるために、Ｊリーグにおける人種差別と対策を 3 章で述べた欧州サッカーと比較して、原因と改善策を考える。

４．１ 欧州サッカーとの比較

人種差別の対象や方法に焦点を当てると、まず欧州サッカーにおける人種差別は黒人差別が最も多いが、そのほかユダヤや日本人といった特定民族出身の選手に対する差別など、あらゆる種類の人種差別が古くから行われている。方法は、ネット上の SNS を利用した行為も確認されており収拾のつかない事態となっているが、実際の試合が行われている

スタジアム内でのサポーターによる人種差別的応援が大変多くあった。また、選手が差別的ジェスチャーをする場合もあった。一方、Ｊリーグにおける人種差別は、主に黒人選手と朝鮮にルーツを持つ選手が標的にされている。方法としては、スタジアム内で行われたサポーターによる差別的な野次や横断幕、黒人を侮辱するバナナを利用した事件が起きた。また、近年はネット上の SNS を利用した行為が毎年確認されている。犯行者は、ほとんどがサポーターによるもので、選手間での出来事として話題になった 2009 年の事件は、行為がなかったことが確認されている。

比較すると、人種差別の対象が黒人である点は共通している。古くから行われてきた日常的な人種差別や人種偏見が、日本・欧州ともにサッカーで横行している、と考えられる。また、Ｊリーグにおいて、スタジアム内で行われる人種差別行為は、欧州に比べて少なく収まっている。しかし、SNS を利用した行為の数は突出していることが分かる。

人種差別対策に着目すると、Ｊリーグは、JFA によるリスペクトプロジェクトや差別問題を防止する専門家の設置、FIFA の世界基準に合わせた規定を設けるなど、人種差別を撲滅させるために積極的に動き始めていることは評価に値する。その結果、Ｊリーグにおける人種差別が起き始めて僅か数年ではあるが、スタジアム内での人種差別行為が 2014 年横浜Ｆ・マリノスのサポーターによる事件以来起きていないことから、スタジアム内での人種差別対策においては一定の効果を発揮している。しかし、先述した通り、Ｊリーグでは SNS によるネット上での人種差別が毎年起きていることから、Gabriel Kuhn 氏やファーディナンド兄弟が FARE や KICK IT OUT について指摘していたように、Ｊリーグでも人種差別撲滅活動の形骸化を窺うことができる。ドイツ・ブンデスリーガやアマチュアリーグのような形だけに終わらない人種差別対策が求められている。

外国籍選手枠という枠組みについて確認すると、まずＪリーグ所属クラブにおける外国籍選手登録数は 5 名で、この枠とは別に、Ｊリーグ提携国の枠と、通称「在日枠」がそれぞれ 1 つずつある。試合に出場できる外国人選手となると 3 名までで、AFC に加盟国の国籍を保有する選手は、1 名追加で出場できる。一方、欧州 5 大リーグでは、基本的に EU 加盟国の国籍を持つ選手であれば、基本的に制限がなく、それに追加で外国籍選手枠を各リーグで設けている。取り上げたドイツでは、自国出身選手の枠を確保する代わりに外国籍枠を撤廃し、多くの外国籍選手がプレーすることが可能になっている。

以上のことを踏まえ整理すると、Ｊリーグにおける人種差別が起きている原因として、①規制のない SNS での投稿②細かい外国籍選手枠による外国籍選手の活躍する場が少なさと、それによる日本サッカーレベルの停滞をも助長している可能性③現在行われている人種差別対策の形骸化の恐れ、といった 3 つが挙げられる。

４．２ 人種差別無きＪリーグに向けた改善策

本項では前項で比較したことをもとに、以下では、Ｊリーグにおける人種差別撲滅に向けた改善策を、運営するＪリーグ側が行うべきこととサポーター側が行うべきことに分けて考える。

４．２．１ Ｊリーグ側が行うべき改善策

SNSによる人種差別の防止

近年Ｊリーグでは、サポーターによるSNSを利用した人種差別的内容の投稿が毎年のように横行している。SNSの利用については、現在規定されていない。SNSには、かつて遠い存在であったＪリーガーと気軽に関わることができ、自由に投稿できるメリットがある。その一方で、自由であるがために規制することが難しく、匿名性も高い、というデメリットも持つコミュニケーションツールである。犯した人物が特定されて処分が科されたケースもあるが、公にならずに曖昧なまま終わってしまうケースもある。Ｊリーグでは、SNSの利用について学ぶSNS研修が全所属クラブの全選手を対象として行われているが、サポーターに対しても何かしら働きかける必要はあると考える。欧州における人種差別は、3章で述べたようにSNSを利用した行為も起きているが、サポーターの応援歌や横断幕による対処の方が大きな問題となっているため、ネット上での人種差別への対応ができていない。しかし、現実世界とネット世界という違いはあるものの、同じ人種差別行為であることには変わりはない。ネット世界の人種差別を放置することは、2014年に掲げられた横断幕を放置することと同義である。

ただ、日本代表の試合では、サッカーの試合におけるSNSの監視活動が始まっている。日本でレイシズムとヘイトスピーチをなくすことを目指す団体である反レイシズム情報センター（ARIC）が、FAREと連携し、昨年の2018年ロシアワールドカップ最終予選で差別的な応援歌や横断幕、インターネット上の差別的な表現の監視活動を開始した[30]。日本代表だけでなくＪリーグにおいても、こうした活動が行われることが求められる。ただ、SNSは24時間365日利用されるものであるため、試合中に監視したからといって全てを把握できるわけではない。事実、ＪリーグでのSNS利用による人種差別は試合中ではなく試合後に起きている。いずれは、ＪリーグとTwitter社やFacebook社などが連携して、人種差別的内容の投稿を防止できるシステムを導入することや、サポーターによるSNS利用に対する一定のルール・罰則等のガイドラインが必要なのではないか、と考える。

外国籍選手枠の見直し

欧州サッカーと比較して明らかなように、Ｊリーグにおける外国籍選手枠は細かく規定されている。外国籍選手枠は、日本でプレーする外国人選手がマイノリティとしてカテゴライズされ、プレーできる人数も少数に限られてしまう。1章で述べたように、差別とは「自分には関係のない、二分法的な見方で捉えるもの」ではなく、「誰もが無意識に行っている可能性のあるものとして捉えるべきである。また、人種差別は過去の歴史から生まれた偏見を用いて、警戒・軽蔑することである。外国籍選手枠は、外国籍選手を無意識に「自国の選手」と「外国籍選手」と二分し、差別行為や偏見を助長することに少なからず影響を与えていると考える。

一方、欧州5大リーグでは、基本的にEU加盟国の国籍を持つ選手であれば、基本的に制限がなく、それに追加で外国籍選手枠を設けている。その結果、選手のプレーできる場格

---

[30]「サッカー差別監視ボランティア」反レイシズム情報センター
http://antiracism-info.com/support/menber/soccerracism(2017.12.1)

段に広がった。その上、海外の優秀な選手たちが欧州に集結することで、国内サッカーのレベルも上がってきた。それを裏付ける証拠として、FIFA ワールドカップの結果が挙げられる。日本代表は FIFA ワールドカップに 1998 年から 5 大会連続で出場しており常連になりつつある。しかし、ベスト 16 が最高成績で、直近の 2014 年ブラジル大会ではグループリーグで敗退しており、上位に食い込むことはできていない。一方、欧州では、日本がワールドカップに出場し始めた 1998 年大会からの 5 大会に目を向けると、フランス、スペイン、イタリア、ドイツと 4 大会で欧州の国が優勝している。また、3 章で確認したドイツ・ブンデスリーガでは、自国選手がプレーできる枠を確保する代わりに、外国籍選手枠を撤廃している。その結果、ブンデスリーガもドイツ代表もレベルは向上し、人種差別も他国より少なくなっている。ただ、この制度の背景には、確立した国内の若手育成システムの存在がある。これを導入するには多大なコストや指導者、場所などが必要になると思われるため、すぐに導入すべきだとは断言することはできない。しかし、Ｊリーグが誰にでも「オープン」なサッカーリーグを目指していることは、2 章で述べた通りである。また、Ｊリーグ設立趣旨の 1 項では「日本サッカーの発展と強化」、2 項では「トップレベルの選手・指導者に、やり甲斐のある場を提供し、その社会的地位を高めていく」としている。これらのことを踏まえると、Ｊリーグにとって当たり前の存在になっている外国籍選手枠を広げること、そしていずれは撤廃することを検討すべきではないか、と考える。本研究を行う初めの段階で、Ｊリーグやクラブに取材を申し込んだが、一般からのインタビューは全く受け付けていなかった。そうしたＪリーグの閉鎖的な方針も、見直す必要がある。

４．２．２ サポーター側が行うべき改善策

現在、Ｊリーグにおける人種差別対策はリーグやクラブが実施している。具体的には、Ｊリーグはリスペクトプロジェクトによる活動、コンプライアンスオフィサー・ウェルフェアオフィサーの設置、「オープン」と 3 つのフェアプレーの実現を目指し、Ｊリーグ所属クラブの例として挙げた浦和レッズでは、「SPORTS FOR PEACE！」プロジェクトや“ZERO TOLERANCE”を策定し、国連とも連携して撲滅活動を行ってきた。その効果は、横断幕事件直後に横浜Ｆ・マリノスのサポーターによる事件が起きたものの、それ以来スタジアム内での人種差別行為が起きていないことに表れている。しかし、SNS での人種差別的内容の投稿が行われていることを踏まえると、これまでの対策を優れたものであるとすることはできない。また、リーグやクラブが実施できる人種差別対策にも限界がある。そのため、サポーターによる自主的な人種差別撲滅活動が求められるのではないか、と考える。欧州サッカーでは、FARE や Kick It Out のように、公式な組織以外の組織が中心となって撲滅活動をしている。これらは、Gabriel Kuhn 氏やファーディナンド兄弟が主張するように、スローガン倒れや形骸化が懸念されている。こうした人種差別と闘う組織は、サポーターから生まれたものではあるが、「欧州」という枠組みが大きすぎて欧州各々のリーグでの対策ができていない印象がある。実際、Kick It Out キャンペーンが行われているイングランド・プレミアリーグやその他のリーグでも人種差別が起きてしまっていることは、前章で述べた通りである。しかし、ドイツでの取り組みのように、各クラブのサポ

ーター自らが人種差別に対して敏感になり、リーグやクラブに頼らない自主的な撲滅活動が功を奏している。

先述したように、Ｊリーグではサポーターによる SNS での人種差別が起きている。Ｊリーグやクラブがこれまで通り人種差別対策を行うこと、そして SNS 対策や外国籍選手枠を検討することも必要ではある。しかし、サポーター自らも人種差別に対しての姿勢を見直す必要がある。「JFA やＪリーグ、クラブが撲滅活動をするものである」あるいは、「私は差別していないし、これからもしない」として自分から離れたところで起きている現象と捉えるのではなく、サポーター自身もより良いＪリーグとするために、それぞれの行動に責任を持ち「誰もが差別する可能性があること」を自覚し、撲滅に向けた取り組みをすべきである、と考える。

おわりに

以上、本論文では「差別とは何か」を定義し、そのうちの人種差別について整理した上で、Ｊリーグにおける人種差別の事例と対策を欧州サッカーでのそれと比較し、原因と改善策を探ってきた。その結果、Ｊリーグでの人種差別が起きている原因は①SNS における人種差別が規制されていないこと②細かい外国籍選手枠により外国籍選手がカテゴライズされＪリーグで活躍できる場が少なく、また、それが日本サッカーの停滞をも助長していること③現在行われている人種差別対策の形骸化の恐れがあることであった。そして、人種差別を無くすためには、Ｊリーグ側が行うべき改善策として、SNS 運営会社との連携による人種差別的投稿の防止システムやサポーター向けの利用ガイドラインの作成と、外国籍選手枠の見直し、サポーター側が行うべき改善策として自主的な人種差別撲滅活動が求められていることが分かった。

欧州サッカーでは様々な対策が施されているが、多くの人種差別が蔓延しており、撲滅できる未来はほど遠いと思える。しかし、Ｊリーグにおける人種差別は、近年顕在化し始めたものである。Ｊリーグにおける人種差別が根付いて取れない錆となる前に、運営側だけでなくサポーター側も含めたＪリーグに関わる全ての人々が「誰もが無意識に差別している可能性」に気づき、今現在当たり前になっている仕組みや人種差別対策が見直されることを願っている。

ただ、本論文は「サッカー」という枠組みでしか論じられていない。Ｊリーグから人種差別を完全に撲滅するためには、政治や法律の問題、文化の違いなどあらゆる面からＪリーグを見つめる必要がある。例えば、不当な差別発言であるヘイトスピーチや表現の自由、黒人や在日朝鮮人と日本人の関係などである。そのため、いくらＪリーグで人種差別を防止する改善策を取り入れたとしても、「人種差別の思想をサポーターから取り除いた」と断言することはできない。今後は、Ｊリーグにおける人種差別の問題を日本全体の問題として捉え、大きな視点でサッカーと人種差別について考えたいと思う。

参考・引用文献

青山鼓,2014,「浦和ウルトラ師弟問答」『浦和レッズマガジン　2014年3月号』朝日新聞出版

宇都宮徹壱,2014,「村井満　Jリーグチェアマン　5 代目チェアマンが描くJリーグの未来図」『サッカー批評 issue68』 双葉社

浦和レッドダイヤモンズ公式サイト「浦和レッズ 差別撲滅に向けたアクションプログラム『“ZERO TOLERANCE”(絶対許さない)』の策定について」
http://www.urawa-reds.co.jp/clubinfo/%E6%B5%A6%E5%92%8C%E3%83%AC%E3%83%83%E3%82%BA-%E5%B7%AE%E5%88%A5%E6%92%B2%E6%BB%85%E3%81%AB%E5%90%91%E3%81%91%E3%81%9F%E3%82%A2%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B0%E3%83%A9/(2017.12.1)

浦和レッドダイヤモンズ公式サイト「差別撲滅宣言について」
http://www.urawa-reds.co.jp/clubinfo/%E5%B7%AE%E5%88%A5%E6%92%B2%E6%BB%85%E5%AE%A3%E8%A8%80%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6/(2017.12.1)

浦和レッドダイヤモンズ公式サイト「ファン・サポーターの皆様へ」
http://www.urawa-reds.co.jp/clubinfo/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%82%B5%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%81%AE%E7%9A%86%E6%A7%98%E3%81%B8/(2017.12.1)

浦和レッドダイヤモンズ公式サイト「SNSにおける差別的な投稿について (第3報)」
http://www.urawa-reds.co.jp/clubinfo/sns%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E5%B7%AE%E5%88%A5%E7%9A%84%E3%81%AA%E6%8A%95%E7%A8%BF%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%E7%AC%AC3%E5%A0%B1/(2017.12.1)

浦和レッドダイヤモンズ公式サイト「SNSにおける差別的な投稿について (続報)」
http://www.urawa-reds.co.jp/clubinfo/sns%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E5%B7%AE%E5%88%A5%E7%9A%84%E3%81%AA%E6%8A%95%E7%A8%BF%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%E7%B6%9A%E5%A0%B1/(2017.12.1)

浦和レッドダイヤモンズ公式サイト「『SPORTS FOR PEACE！』プロジェクトについて」
http://www.urawa-reds.co.jp/clubinfo/%E3%80%8Csports-for-peace%EF%BC%81%E3%80%8D%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%82%AF%E3%83%88%E3%82%92%E9%96%8B%E5%A7%8B/(2017.12.1)

浦和レッドダイヤモンズ公式サイト「3月8日Jリーグ浦和レッズ対サガン鳥栖におけるサポーターによるコンコース入場ゲートでの横断幕掲出について」
http://www.urawa-reds.co.jp/wp-content/uploads/2014/03/efa71bb4821b60262c4f8001b71af4a3.pdf(2017.12.1)

外務省「あらゆる形態の人種差別の撤廃に関する条約」
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jinshu/conv_j.html(2017.12.1)
ゲキサカ「人種差別チャントに抗議で自らピッチを去ったムンタリ、退場処分は取り消しに」
https://web.gekisaka.jp/news/detail/?215485-215485-fl(2017.12.1)
ゲキサカ「人種差別発言確認できず処分は見送り」
https://web.gekisaka.jp/news/amp/?57136-39607-fl(2017.12.1)
ゲキサカ「バスティア、バロテッリへ人種差別チャントをした40歳男性を出入り禁止処分に」
https://web.gekisaka.jp/news/detail/?208421-208421-fl(2017.12.1)
ゲキサカ「バロテッリの出場停止は1試合…差別的発言を問題視」
https://web.gekisaka.jp/news/detail/?153853-153853-fl(2017.12.1)
ゲキサカ「ルカク、自身への人種差別チャントに訴え「互いをリスペクトしよう」
https://web.gekisaka.jp/news/detail/?226674-226674-fl(2017.12.1)
公益財団法人日本サッカー協会公式サイト「競技及び競技会における懲罰基準」
http://www.jfa.jp/documents/pdf/basic/08.pdf(2017.12.1)
公益財団法人日本サッカー協会公式サイト「国際サッカー連盟（FIFA）ってなに？」
http://www.jfa.or.jp/info/inquiry/2011/11/fifa.html(2017.12.1)
公益財団法人日本サッカー協会公式サイト「プロサッカー選手の契約、登録及び移籍に関する規則」
http://www.jfa.jp/documents/pdf/basic/10.pdf(2017.12.1)
公益財団法人日本サッカー協会公式サイト“63rd FIFA CONGRESS 2013 “Resolution on the fight against Racism and discrimination” ”
https://www.jfa.jp/about_jfa/report/PDF/k20131114_02_01.pdf(2017.12.1)
公益財団法人日本サッカー協会『JFAnews10月情報号』2016, 5頁
公益財団法人日本プロサッカーリーグ「公益社団法人日本プロサッカーリーグ規約・規定集」
https://www.jleague.jp/docs/aboutj/pdf_2017.pdf (2017.12.1)
陣野俊史,2014,『サッカーと人種差別』文藝春秋
スポーツニッポン2014年3月14日朝刊「浦和 無観客で経済損失3億円…村井チェアマンが断罪 『放置は加担と同じ』」
http://m.sponichi.co.jp/soccer/news/2014/03/14/kiji/K20140314007771270.html(2017.12.1)
鈴木良平,2011,『世界一観客の集まるサッカーリーグ ブンデスリーガ事情通読本』東邦出版
清義明,2016,『サッカーと愛国』イースト・プレス
塚越始,2014,「横断幕問題で厳罰 浦和、無観客試合に」『週刊サッカーダイジェスト 2014年4月1日号』日本スポーツ企画出版社
日刊スポーツ 2010年6月9日朝刊「浦和に制裁金500万円 差別発言でJ処分」
https://www.nikkansports.com/m/soccer/news/p-sc-tp0-20100609-639475_m.html(2017.12.1)
日刊スポーツ2015年3月10日朝刊「Jリーグ、クラブ制裁追加『一部観客席の閉鎖』」

https://www.nikkansports.com/m/soccer/news/1444588_m.html(2017.12.1)
日本経済新聞 2014 年 4 月 22 日「Ｊリーグ、差別問題対応で規定改正 禁止行為を明記」
http://mw.nikkei.com/sp/#!/article/DGXNSSXKC0685_S4A420C1000000/(2017.12.1)
反レイシズム情報センター「サッカー差別監視ボランティア」
http://antiracism-info.com/support/menber/soccerracism(2017.12.1)
フットボールチャンネル「『外国人枠』拡大はＪリーグの成長につながるか。ドイツという手本。保護と競争のバランス」
https://www.footballchannel.jp/2016/10/14/post179923/(2017.12.1)
フットボールチャンネル「バロテッリ、今季 SNS で 4000 通以上の人種差別メッセージを受けていたことが判明」
http://www.footballchannel.jp/2015/04/17/post83311/(2017.12.1)
ブンデスリーガ公式サイト「観客動員数、過去最高を記録」
http://www.bundesliga.com/jp/news/%E3%83%96%E3%83%B3%E3%83%87%E3%82%B9%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%82%AC%E3%81%8A%E3%82%88%E3%81%B3%E5%90%8C2%E9%83%A8%E3%81%AE%E8%A6%B3%E5%AE%A2%E5%8B%95%E5%93%A1%E6%95%B0_%E9%81%8E%E5%8E%BB%E6%9C%80%E9%AB%98%E3%82%92%E8%A8%98%E9%8C%B2.jsp(2017.12.1)
ブンデスリーガ公式サイト「ブンデスリーガ Q&A:基礎知識編」
http://www.bundesliga.com/jp/news/0000313033-2.jsp (2017.12.1)
毎日新聞 2016 年 6 月 16 日西部夕刊「Ｖ長崎選手ツイッターに差別投稿　被爆者や朝鮮人、侮辱」
https://mainichi.jp/articles/20160616/ddg/041/050/004000c (2017.12.1)
森雅文,2014,「ピッチ上で起きた問題から考えること」『サッカー批評 issue68』双葉社
横浜Ｆ・マリノス公式サイト「マルティノス選手への差別的行為に関して」
http://www.f-marinos.com/news/detail/2017-09-25/163000/163705(2017.12.1)
横浜Ｆ・マリノス公式サイト「Ｊリーグの裁定内容及び再発防止策等に関して」
http://www.f-marinos.com/news/detail/2014-08-29/180000/172124(2017.12.1)
好井裕明,2007,『差別原論 〈わたし〉のなかの権力とつきあう 』平凡社
渡邊静夫,1994,『日本大百科全書 12』小学館
FIFA Official Web Site “Discrimination monitoring to be introduced at 2018 FIFA World Cup™ qualifiers”
http://www.fifa.com/sustainability/news/y=2015/m=5/news=discrimination-monitoring-to-be-introduced-at-2018-fifa-world-cuptm-qu-2604235.html#_blank (2017.12.1)
FIFA Official Web Site “FIFA - SAY NO TO RACISM - MY GAME IS FAIR PLAY”
http://www.fifa.com/confederationscup/videos/y=2017/m=6/video=fifa-say-no-to-racism-my-game-is-fair-play-2895097.html(2017.12.1)
footballista「中村祐輝が、現役引退を決めた今だから話す"人種差別"の真実」
https://www.footballista.jp/interview/36942(2017.12.1)
Gabriel Kuhn,2011,"Soccer vs. the State:Tackling Football and Radical Politics",Oakland:PM Press.(=2012 甘糟智子訳『アナキストサッカーマニュアルースタ

ジアムに歓声を、革命にサッカーを』現代企画室,209)
Goal. com「事件から1年、リオとアントンが共同声明」
http://www.goal.com/jp/news/74/%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%89/2012/10/25/3475885/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%83%BC%E3%83%87%E3%82%A3%E3%83%8A%E3%83%B3%E3%83%89%E5%85%84%E5%BC%9F%E5%8D%94%E4%BC%9A%E3%81%AE%E5%8B%95%E3%81%8D%E3%81%AB%E4%B8%8D%E6%BA%80(2017.12.1)
Kicker 日本語版「ブンデス1部2部、歴代最多観客動員数を記録」
http://kicker.town/bundesliga/2017/06/56650.html(2017.12.1)
KICK IT OUT "KICK IT OUT TACKLING RACISM & DISCRIMINATION"
http://www.kickitout.org/about/(2017.12.1)
Tahar Ben Jellon,1998,"Racism Explained to My Daughter",The New Press. (=2007 松葉祥一訳『娘に語る人種差別』,青土社
Wired「ドイツサッカーは、いかに人種差別と戦ったか」
https://wired.jp/2014/03/21/bundesliga/(2017.12.1)